

島田正治

四月、乾期のまっただ中で一滴の雨もない。これは五月いっぱいまで続く。まさに枯れにかけたメキシコといってよい。そして暑くなりはじめた。日本の夏とちがって暑いにはあついが湿気のないのがよい。からりとしている。外へ出て描いていても、じりじりと体の焦げていくのがわかる。赤銅色よりはるかに越えていて黒に近い。ときどき背中を鏡に写してみても「ほんまによく焼けている」と自分でもそう思う。

日本の桜に似ているのが、この頃になって咲きはじめるハカラランダがある。濃い紫に白がまざったという感じの色ぐあい、葉が出る前に花が咲く。また、桜と異なるのが約一ヶ月以上にもわたって咲きつづける。青い空にハカラランダの花が深く溶けこむ。メキシコの人たちはこれで春がきたといってよろこんでいるが、日本人には春をとくに通り過ぎて初夏かと思う。桜並木と同様、ハカラランダ並木があり、そこを通るとあちこちでしゃっしゃっ音をたてて箒木で花びらの掃除をしている。道路一面が落ちた花びらだから、この掃除も容易でない。平気で物を投げたり捨てていくメキシコ人だが、飽くことなくきれいに掃除するはえらい。境界があつて自分の屋敷の前のみで区別しているところもおもしろい。

さて、ことしになってから始めた「サンアントニオ村とその周辺描く—100点制作」は現在四月十日で六十五点となった。描いてきたのを、すぐその日のうちに裏打ちをしてしまう。乾きのいいメキシコだから翌日には描いた結果がよくでるからよい。裏打ちは、日本から刷毛、のり、紙持ってきており、また裏打ちも、昔よく表装屋さんに通ったので、見よう見まねで覚えた。つまり習わぬ門前の小僧で、盗み取ってしまったわけだ。これが今大いに役立っているのである。裏打ちすることで、今まではっきりしなかった墨の白と黒、淡墨のぐあいが微妙に出てくる。

チャパラ湖一帯は野鳥の棲息する場になっている。まさに野鳥の楽園といってよいだろう。さまざまの鳥たちが居る。住宅のまわりは、湖の水のおかげでユーカリの木が繁茂する。その上方の、かなり高いところが鳥たちの寝ぐら（とや）にしていて住む。夕暮れの、ほぼきまった時間に何百という白鳥が三々五々戻ってきて宿る。見上げると何十メートルかの頂きが白い物体で埋まる。ユーカリは背が高いので、ここをとまり木にすることは他の動物から身を護ることになるのもあろう。

明け方、まだ少し夜があげない暗がりの中、一羽去り二羽去り、わずか十分か十五分間に全羽が居なくなってしまう。気がついて見に行くと、木の頂上には一羽の白鳥も居ない。飛翔して再び湖まで行き、小魚を漁る。時間に飛び立ち、時間に戻ってくる。鳥たちは別に時計を持っているわけでもあるまい。日常の自然からその時刻を察知する不思議さがある。いつも自然とひとつになつて行動する。枝から飛び立つときの羽ばたきの見事さ、これに見惚れてしまう。また、戻ってきて、各枝々に止まるときのその着枝のぐあい、よく飛行場などで飛行機が事もなく離陸したり、また着陸するのに似ていて、これらも元はといえば飛ぶ鳥の姿を見て、飛行機が考え出されたことでもある。朝に夕に、こんなところにも動物達の自然の営みがあるのだと感心せざるをえない毎日である。

(つづく)